

越前 翠村（えちぜん・すいそん）

1、プロフィール

和田山蘭、加藤東籬らと東北詩社を創立するなど、本県明治末文壇隆盛に尽くした。大正3年に上京後は若山牧水系の歌人として活躍し、一時は「創作」編集も任せられた。

<生没>

1885(明治18)年 ~ 1928(昭和3)年8月4日

<青森との関わり>

秋田市出身。明治41年青森市に移住。大正3年上京。昭和3年春に病を得て再度末県、高山稲荷神社にて死去。

2、作家解説

歌人であり日本画家。明治18年秋田市に生まれた。本名源一郎。父を早く亡くし、母が青森市に再縁したため、明治41年に青森市に転居し営林局の職員になったという。明治40年ころから「文章世界」ほか中央雑誌に投稿し、その名は知られていた。青森転居後は「東奥日報」紙上で活躍したが、44年3月に青森市に微明会を結成し回覧誌を発行した。この会と五所川原の蘭菊会が合併して東北詩社となったのが同年10月であり、11月には本県最初の活版印刷による短歌雑誌「東北」が発行された。同誌奥付によると第4号までの発行人は越前源一郎となっている。地方文壇で活躍しながら中央誌に投稿しつづけたが、中でも若山牧水の第一期「創作」に出詠した作品が高い評価を得、これが翠村のその後の人生を決定づけたといえよう。

大正3年翠村は、前年上京していた和田山蘭と牧水の二人を頼って上京したが、専門画家をも目ざして寺崎広業(秋田県出身の日本画家、帝国技芸員他)に日本画を学んだ。

しかし、大正8年に寺崎死亡の後には独学で絵画の勉強をし、生活の糧を得た。

上京後の翠村は牧水の取巻きのように創作社に出入りし、その信用を得て第二期の「創作」編集に携わるなど牧水の周辺で華やかに振るまっていたが家庭的には恵まれなかった。生活のために旅の絵師として信州から東北、北海道などを巡ったが生活は常に苦しかった。才藻の豊かな人物であったが、単なる自然詠は比較的少なく、女や酒、人間関係を歌った歌に人々を魅了するものが多いようだ。中でも、薄幸の母を歌った作品には胸をうつものがある。

昭和元年の暮れに精神病で青山脳病院に入院したが、斎藤茂吉の献身的助力で快服し、「ぬはり」や「創作」に精力的に作品を発表していった。しかし、同3年1月に病氣再発し再入院、友人の顔も識別できないほどに弱っていた。その春、青山脳病院から本県西津軽郡車力村の高山稻荷神社社務所に転居し、8月4日に死亡した。